

三省堂

漢和辭典

第二版

長澤規矩也編著

三省堂
漢和辭典
第二版

長澤規矩也 編著



三省堂

昭和46年5月10日 初版発行
昭和52年2月10日 第二版発行



三省堂漢和辞典 第二版

定価 一、一〇〇円

昭和五十四年九月一日 第十二刷発行

編者 長澤規矩也（ながさわ・きくや）

発行者 株式会社 三省堂 代表者 上野久徳

印刷者 株式会社 三省堂 八王子工場

発行所 株式会社 三省堂

〒112 東京都千代田区三崎町二丁目二十二番十四号

電話 編集(03) 二三〇・九四二

販売(03) 二三〇・九四三

総務(03) 二三〇・九五二

振替口座 東京六〇四〇〇

〈2版◎漢和・832 pp.〉

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

この漢和の特徴

観字が見つけやすく工夫してある

明治以来の漢和辞典の部首配列は、漢字の意味に基づいていた。これでは、意味が分からない利用者には引きづらい。私は、学生時代の苦い体験から、初著から全面的にこれを改め、見たままで引けるようにし、戦後、新字体についても工夫した。

同一漢字の各種字形が入っている

同一漢字の字形はかなり多種多様である。そこで、大きな印刷所に常備されている活字の字形は、他の漢和に入っていない誤用の字形まで一々挙げて、略字・俗字・異字などの区別を明確に説明し、これによって、漢和の特質を明確にした。

漢字引きの国語辞書の性格を持つ

わが国における漢字漢語の用法の中には、本来の意味から非常にずれたものがある。従って、一般の世間学生用の漢和辞典は対訳辞書という本質よりも漢字引き国語辞典であるべきもの。よって、字訓語義には国語的要素を豊富に盛った。

熟語総数は一見少ないようで多い

わが国常用の読みやすい熟語については、利用者は国語辞書で検索するという今日の実状から、この種の熟語で、しかも意味が分かりやすいものは、観字の説明の中に用例として入れ、その分だけ他の熟語を入れて、所掲熟語を豊富にした。分かりにくい伝統的用語を避けた

伝統的辞書用語を捨てて、分かりやすい現代的表現を用いた漢和も、私の四十年前の旧著が初めである。取材を世上流通の辞書の上に求めなかった苦心や上記新配列法とともに、戦後の漢和に直接間接に流用されるようになったのはむしろうれしい。
表記法は通行基準に工夫をした

説明用語の難易、漢字使用の多少という点からの書中前後の不統一は、辞書の本質から故意にしたことで、難しい熟語を引く人への説明は易しい熟語の説明より難しくても当然。前後両行の仮名書き漢字書きは一定させない方が分かりよい。

同一ページ中に豊富な内容を盛る

辞書の内容は「必要かつ十分」であるべきもの。むだを省いて落ちがなく、読みにくくない程度で余白を減じ、分かりやすい符号を使って余計な文字を避けるという編修方針によって、同一ページで内容を豊富にし、鮮明な独特の印刷法によって。

廿	业	挂	夫	母	北	古	戊	牙	立	穴	内	禾	示	石	矢	矛	目	四	皿	皮
五九	五九	五九	五七	五七	五三	五二	五二	五二	五二	三〇	五五	四九	四九	四九	四九	四九	四八	四八	四八	四八
艮	舟	舛	舌	白	至	自	臣	肉	聿	耳	未	而	老	羽	羊	网	缶	糸	米	竹
五三	五三	五三	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇
豸	豕	豆	谷	言	角	見	興	良	足	其	曲	矢	瓜	西	衣	行	血	虫	艸	艸
五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七
門	長	金	奴	長	鳥	舛	臣	里	采	西	邑	走	辰	辛	車	身	足	足	走	赤
五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七
秋	香	首	食	飛	風	貞	音	韭	韋	革	面	尢	卓	來	食	非	青	雨	佳	求
五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七
霍	殿	殷	幽	麻	鹿	麥	鹿	齒	齒	齒	齒	齒	齒	齒	齒	齒	齒	齒	齒	齒
五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七
藺	俞	龍	龍	齒	齒	齒	齒	齒	齒	齒	齒	齒	齒	齒	齒	齒	齒	齒	齒	齒
五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七

部首索引

・印は
例外部首

乃
一六

工
一六

心
一六

父
一六

夕
一六

夕
一六

一
一六

口
一六

口
一六

干
一六

戈
一六

比
一六

王
一六

王
一六

力
一六

口
一六

口
一六

广
一六

手
一六

氏
一六

王
一六

王
一六

リ
一六

口
一六

口
一六

广
一六

支
一六

氏
一六

王
一六

王
一六

ノ
一六

口
一六

口
一六

广
一六

支
一六

氏
一六

王
一六

王
一六

乙
一六

口
一六

口
一六

广
一六

支
一六

氏
一六

王
一六

王
一六

丁
一六

口
一六

口
一六

广
一六

支
一六

氏
一六

王
一六

王
一六

一
一六

口
一六

口
一六

广
一六

支
一六

氏
一六

王
一六

王
一六

二
一六

口
一六

口
一六

广
一六

支
一六

氏
一六

王
一六

王
一六

人
一六

口
一六

口
一六

广
一六

支
一六

氏
一六

王
一六

王
一六

人
一六

口
一六

口
一六

广
一六

支
一六

氏
一六

王
一六

王
一六

人
一六

口
一六

口
一六

广
一六

支
一六

氏
一六

王
一六

王
一六

人
一六

口
一六

口
一六

广
一六

支
一六

氏
一六

王
一六

王
一六

人
一六

口
一六

口
一六

广
一六

支
一六

氏
一六

王
一六

王
一六

人
一六

口
一六

口
一六

广
一六

支
一六

氏
一六

王
一六

王
一六

人
一六

口
一六

口
一六

广
一六

支
一六

氏
一六

王
一六

王
一六

人
一六

口
一六

口
一六

广
一六

支
一六

氏
一六

王
一六

王
一六

「第二版」序

同じ著者が、同一出版社から、同種類の辞書を出していることはおかしいという評が、利用者からも、小売店からも出ているが、これは編修にみずから苦心をしている私には解せないことである。ある大出版社の重役は、専門的な大辞典を作れば、小さな学習辞典は容易に作れるはずと言ったが、これも大変な間違いである。

辞書とは決してそういう性質のものではない。使いやすい、便利な辞書は、利用者にぜひとも必要な言葉を漏れなく収め、大して必要のない熟語を省く、つまり、「必要にして十分」を収録の主眼にしなければいけない。従って、漢和について言えば、専門家用辞典から抜粋した学習辞書は、熟語も説明も満足なものにはなり得ない。学習辞書には、専門辞書にない熟語を加え、専門辞書より易しい表現を使わなければいけない。同じ辞書内でも、難しい熟語と易しい熟語との説明文の表現には難易の別があるべく、漢字と仮名との使い分けも必要である。

こういう点から見ても、現代表記法が改訂されたからといって、私はすぐ全面的にそれに従うということはない。ことに、従来の仮名書き部分が漢字で書けるようになったからというので、説明文の仮名を漢字に改めては、従来の表記法を覚えている利用者には使えなくなってしまう。

この辞書では、親字の音訓については、現代表記法で漢字書きが認められている部分はゴシック体—太文字—で表示し、熟語については、そのまま漢字で書ける言葉の上下には【】、書けない言葉の上下には『』の符号をつけた。この二点については、今回の第二版では、

全面的に更訂したが、説明文にあつては、漢字書きをふやすようなことはしなかった。「表（現）われる」の「わ」、「行なう」の「な」のような送り仮名は削った。不合理な「実る」「伴う」などは、仮名書きを採用した。

語学辞書内における、自然科学的、社会科学的使用語の説明は、専門的には不十分であつても、理解し易いという点が先行する。又、人間がすることに完全は望めない。今回の改版に際しては、みずから気付いた誤りはもとより、利用者からのご注意は、再検討の上、改むべき部分を訂正させていただいた。ご教示に深謝するとともに、さらに皆様に甘えて、本辞書の誤りを少しでも減らしたいと思う。よろしくご援助をお願いする。

改訂の初稿は一昨年に成った。社の松村武久君のいつもの通りの助力によつたところが大きい。ところが、たまたま発行所三省堂が、経営上の不合理から倒産し、かねてこれを憂えて、取るべき印税も遠慮していた私は、当然著者の債権者の筆頭となつたし、三省堂現役著者中の古参でもあるので、会社再建に当たつて、管財人の相談役の重任を引き受けることとなつた。相談役となつたからには、自己の著書を他に先行させて発行するわけにはいかないのので、改版を遠慮していたが、今や管財人として世に名声を博している上野弁護士のご努力によつて、再建計画が成つたので、逆旅にこもつて、心行くばかり刪補更正をしたのがこの第二版である。歴史ある三省堂の再建には、管財人を初め、社員一同とともに協力して、利用者の恩顧に報いたいと念願してやまない。

なお、今回の改版に際しては、特に、外池嘉子さんの尽力に感謝する。

昭和五十二年一月

長澤規矩也

本書の使い方 (生徒諸君に)

—— 使う前に十分よく読んでください ——

一 漢和辞典のむずかしさの解消

みなさん！

みなさんはどんなときに漢和辞典をお使いになりますか。意味がはっきりしない漢字漢語に出会ったときには、いつでも漢和辞典をお引きになりますか。そうではないでしょう。その漢字漢語の読みがわかっているときは、漢和辞典は引きにくいからというもので、国語辞典をお使いになるのではありませんか。辞書というものは、使い慣れないと利用できません。ですから、読めない漢字漢語に出会ったとき、急に、先生がたに教えられていた漢和辞典を本だんなから取り出してみても、なかなか目的の漢字や漢語が引き出せないのです。そして、漢和は引きにくい、引きにくいと口ぐせに言っておいでしよう。たしかに漢和辞典は国語辞典より引きにくいものです。しかし、引きにくいから引かないと言って、利用しないでいると、いつまでたっても使いこなせないのです。わからないことを容易に人に尋ねることができる在学中はそれでもよいとして、ひとり立ちになって社会に出たら、どういうことになりましょう。

たしかに漢和辞典は引きにくいでしょう。しかし、使い慣れると、案外たやすく利用ができるようになります。この「本書の使い方」の内容をよくよく読んでみてください。もっとも、明治・大正のころにできた漢和辞典を使いこなすことは、漢文の専門家でも、今日の若い方にはむりのようです。まして、みなさんには

むりにきまっています。それはなぜでしょうか。

- ① 一字一字の漢字が辞書のどこにあるか、わからない。
- ② 熟語の上の一字が見つけ出せても、目的の熟語を見つけないに時間がかかる。

- ③ やっと漢字漢語を見つけて出せても、説明の用語がはつきりつかめない。

このことは大正ごろの生徒——すなわちわたくしたち——も感じていました。そこで、当時から次のくふうがなされてきました。

- ① (ア) 全部の画数で引く総画索引をつけた。

(イ) 音訓索引をつけた。

- ② (ア) 第二字めの読み順の五十音順に並べた。

(イ) 第二字めの読み順の五十音順に並べた。

しかし、③については方法がなかったようです。同じ辞書の中で説明が矛盾(むじゅん)、このことばをこの漢和で引いて(ごらん)なさい)していたり、わからないことばが使っているうちに、そのことばを同じ辞書の他のところで引き引きしているうちに、いわゆる堂々めぐりになったり、専門用語が専門家には正しくても、利用者にはむずかしくて、理解できないものがありました。

これは、一つの辞書を大ぜいの助手が分担して原稿を書き、その分担者が、たやすく分担部分をまとめ上げようと、他の辞書の説明を引いたり、みずから内容がつかめない用語をそのまま写したからで、しかも責任をもって統一することがないからです。ここで、戦前に考え出されたくふうを、今日の利用者の立場から考えなおしてみましょう。

みなさんは、読めない漢字や漢語は、国語辞典では調べられないから、漢和辞典をお使いになるのでしょうか。ですから、音訓索

引がついていても、戦前の利用者と比べて、その利用度ははるかに低いものです。総画索引があっても、同一画数の漢字が多い画については、なかなか捜し出せません。熟語についても、音訓索引同様、第二字めの五十音順に並べては、今日の利用者には不便です。

みなさん！

物を買うときのことを考えてみましょう。物があまりたくさんあると、目移りがして、なかなかこれはというものが見つかりません。だれかが前もって選んでおいたものの中から選び出すとか、若い人むきの品物を専門に扱っているお店に行ってみると、選びやすいでしょう。

辞書だって同じことです。字数が多いとか、国語辞典で引けるような熟語まで漢和辞典にはいつているとかいうことは、みなさんにとつては選び出しにくい原因となります。

この辞書の内容は、みなさんむきの品物の専門店の品物のように限定しました。といっても、今はいらぬというものを全部省略すると、まもなく不十分となつてしまいます。そのことは、もちろん考えに入れて、いくらか余分に内容を選択しました。

品物——いや、漢字漢語をどのように並べたか、みなさんがたやすく捜し出せるように並べた、その並べ方を説明してみます。

まず、漢和辞典の内容構成について説明してみよう。
今日の漢和辞典というものは、漢字の一字ずつについて、古来わが国で使っている読み方と漢字のもとの意味とをしるし、その説明のあとには、その漢字——親字といひます——が頭についている二字以上のことば——熟語といひます——を並べて、その発音と意味とをしるしたものです。親字は、多くの漢字の中

ら、共通部分を取り出して、共通部分ごとにまとめてあります。この共通部分を部首というのです。

二 親字の配列の改良

漢字というものの多くは、左右か上下かに二分できます。左右に二分したとき、左半分を偏（ヘン、扁とも書く）といい、右半分を旁（つくり）とよび、上下に二分したとき、上半分を冠（かんむり）といい、下半分を脚（あし）とよびます。中には、左右にも、上下にも分けられないものがあります。部首の多くは、偏または冠として使われるものです。ところが、中には旁や脚に使われている部分の部首にはいつている漢字があります。また、分けようと思えば分けられるのに、全体を部首にしたものがあります。これは、この字のほかに、この字の全体を偏旁冠脚にした字があるからです。また偏旁冠脚の中から取り上げるのに、偏冠を取り出さずに、旁脚を取り出して、その部首に従属させたものがあります。それはなぜかというと、意味の上で、偏や冠よりも重点が旁脚にある漢字であるからというためです。これでは、みなさんが捜している意味がわからない漢字が捜し出せるはずがありません。

そのうえ、明治・大正の漢和辞典では、昔からのきまりどおりに、イが人部、リが刀部、ハが心部、マが手部、ノが水部、ミが大部、旁にあるフが邑部、偏にあるフが阜部にはいつていました。これらのイ・リ・ハなどは、いくらか部首表を捜してもありません。ただ、人・刀・心などの下に小さく付記されていたにすぎませんでした。しかも一方では、口と土と土、日と日、月と月（肉部にはいつていました）が二つに分け

てありました。

わたくしは、若いころ、これらの引きにくい点を改めようと、

① 特別なものだけに例外を明示して、意味は全く考慮に入れないで、見たままの直感に従って、できるだけ偏や冠で引き出せるように改める。

② 多くの漢字の上半分または左半分に共通してある形で、従来の部首にないものは新しく部首を作る。

③ イ・リ・ナ・キ・シ・ヤ・オ・ハ(右)・フ(左)というような部首を作る。

④ ㄷとㄱ、土と士、日と曰、月と月などの部首を一つに統合する。

ということを考え出し、漢和辞典に一大革新をいたしました。これが、昭和十二年に、本書の出版所である三省堂から発刊しました「新撰漢和辞典」で、みなさんの「おとうさま」や「おかあさま」が便利に使われた漢和辞典です。ですから、わたくしが漢和辞典を作り始めてから、もう四十年にもなるのです。いいかえれば、わたくしは、漢和辞典編修(集の字を書くことは辞書の編者としては賛成できません)の長い体験を持っています。しかも、引きにくい漢和辞典の構成を直そうと考え始めましたのは、それより二十年近くも前の中学生のときからで、戦前戦後を通じて、引きにくいと思われがちな漢和辞典を引きやすくしようと考えてばかりいました、今でも考え続けています。

ところが、戦後、また問題が出ました。というのは、字源を無視し、慣用を度外視した新字体というものが、漢字の知識を全く持たないローマ字論者と、これにただ追従することにのみ夢中であった漢文教育家によって造り出されたからです。漢字の専門家

も漢和辞典編作の経験者もひとりも参加しないで造られたのが新字体です。とにかく、いろいろと批評されるのをきらって明治・大正を通じて世間で使われていた字形を考えに入れずに、江戸時代の著作を根拠にしたといわれています。そこで、「新撰漢和辞典」の漢字の内容と配列とを、原則は元のままにして、一部分増したり改めたりしなければならなくなりました。ところが、戦後できた漢和辞典では、字形がすっかり変わってしまったのに旧字の部首のままに新字体を従属させました。たとえば、画(旧字体は兩)が入部に、単(單)が口部に、円(圓)が口部に、会(會)が日部に、尽(盡)が血部に、旧(舊)が白部に、万(萬)が艸部に、売(賣)が貝部に……というようなものです。そこで、わたくしは、わたくしの原則に従って、画を一部に、単を二部に、円を口部に、会を入部に、尽を戸部に、旧を一部に、万を一部に、売を土・士(上)部に収めることを考えました。

つまり、

⑤ 新字体の各字は、①および②の原則に従って並べ、そのために新しい部首をさらに作る。

ということをして、新時代の若い方々にとって、最も引きやすい漢和辞典にしました。これが「明解漢和辞典」です。

漢和辞典の引きにくい理由のもう一つは、漢字の画数がよくわからないということでした。これは、戦後の若い方にとっては、いつそうの難事です。というのは、戦後の教科書には、小学校用に使われる筆写体(教科書体)と、中高用に使われる活字体(明朝体)と二種あって、両者の字形に差があるのみならず、活字の字形には、形を整えるために、筆をとめる部分を強く表し、一画多いように見えることがあるからです。たとえば、「比較」の「比」

の字は四画に数えるのですが、活字の「比」の字の偏は明らかに五画で、わたくしの「長」の字も、八画ですのに九画にも見えます。「之」は、部の三画ですが、二画に数える人が多いでしょう。そこで、いっそのこと、曲がった別に一画に数えても引き出せるようにくふうしました。もつとも、これはわたくしの創意ではなく、書道の大家藤原楚水（喜一）先生が三省堂の顧問であつたときに示された、ご意見に従つたのです。

⑥ 画数がはつきりしないものは、どう数えても引き出せるように重出する。

⑦ 筆法で、曲がった一画に数えても引き出せるように重出する。ただし、はねる場合（事の縦棒など）・湾曲の場合（心の第二画）・運筆の初め（旧字の又の末画）などは、一画として加えない。

このように本文に親字を並べると、従来の辞書にあるような引きにくい「総画索引」はいりませんが、利用者のご要望を入れ、筆法別の新式の総画索引を加えて、筆順の第一画の筆の運び方から検索できるようにしました。また、「音訓索引」は、音か訓（漢字にあてられたわが国での一定の読みの単語）のどれかを知っているときに、その音または訓から引くものですから、整理した上で巻末に載せておきました。

同一部首の同一の画数内の漢字の配列の順序については、いろいろ考え続けていますが、まだこれなら文句がないというものがみつかりません。筆順法も考えてみましたが、とにかく、昔の清国の字書の順を、無意味に受け継ぐよりはまだましだと、戦前の辞書で改良されました、音の五十音順にしました。漢字の音というものは、多くは、估・柏・鯉のように、部首にならないほ

うの半分の音と同じですから、みなさんが音を知っていなくても、いちおう見当がつきます。

⑧ 同一部首同一画数内の親字の配列は慣用の字音の五十音順による。

三 親字の引き方

では、みなさんといっしょに、調べたい漢字を、この辞書ではどのようにして引き出すか、考えてみましょう。つまり、親字の見つけ方調べ方の練習です。

まず、漢字を左右か、上下かに分けられるかどうか、考えてみます。分けられたら、左半分（偏）か、上半分（冠）かが部首にあるかどうか捜してみます。

例一 相 左右に分けると木と目になります。そこで「木」が四画ですから、部首索引（表紙の裏）の四画の中で「木」を捜します。ありました。そして、「木（左）部」が四二七ページから始まっていることを知り、それから、「目」が五画ですから、次にくの外「柱」とよびます——で、「木（左）」の5を見つめます。5の下の方が字音ですから、「相統」ということばの「相」の慣用音「ソウ」を見つて、四三〇ページ第三段に捜しあてました。本文の【相】字の上の「5」という数字が木部の五画であることを示します（なお、画数の変わりめはわかりやすいように太字の数字にしています）。そのすぐ下の、小学校の教科書でみなさんが見慣れた字体が筆写体です。その下の「もと目4」というのは、普通の漢和辞典では目部四画にあることを示します。なぜ古くからの辞書で目部に入れたかというのと、「みる」つまり、木に

登ってみるとよく見えるということからできた漢字であるからです。これでは、「みる」という意味を知っていないと、捜し出せないではありませんか。この辞典は、そこで、目で見たまの直感によってわかる「木部」で引けるように直しました。

例二 季 二度めですから、少し簡単にしましょう。上下に二分すると禾と子になります。部首索引の五画の中で、「禾部」の初めが四九八ページにあることがわかり、三画の「季」は五〇〇ページの第三段に出ていました。「もと子」とあるのは、この字のもともとの意味が「すえつ子」であるからです。そうだからといって、みなさんに、「季」の字を「子」部の中に見いださなさいといってもむりでしょう。ですから、わたくしは、五十年も前から「禾」部に入れるのが当然だと考えていて、三十数年前に、はじめて漢和辞典を作ったときに、この理想を実行に移したのです。

例三 賀 この字は上下に二分すると加と貝とになります。部首索引の五画には「加」がありません。こういうときには、もう一度部首索引で下の半分の「貝」を引きましょう。ありました。しかも、「(左・上)」と「(下)」と二つありました。この辞書では、前の「木」も上・下・左・その他に分けましたが、口・土なども、同一画数に属する文字が多いので、引き出しやすいように、その中を分けたのです。そこで、この「賀」の字がその五画(五八〇ページ)に見つかりました。「貴」の字にしても、上半分は部首にはありませんから、やはり、この「賀」の次にあります。このように、偏や冠でなく、旁や脚で引くものは、部首索引の部首字形の下に例外部

首として*じるしをつけておきました。欠・頁・魚・鳥などがそれであります。

例四 嗣 左右に二分することはできませんが、どちらの半分も部首にありません。こういうときには、左半分のさらに上半分の口(その他)で引いてみて、口部十画に見つけます。

例五 啓 上下に二分することはできませんが、上半分は部首にありません。下半分の「口」の部首には(その他)はありますが、*じるしがありません。ですから、上半分のさらに左の戸の七画で引きます。

例六 米 これは左右にも上下にも二分できません。ですから、全部を六画の部首で引きます。

前に説明しました、曲がったら一画に数えると、「相」は木部六画で、四三三ページ上段に、「賀」は貝(下)部七画で、五八一ページ第四段に、「嗣」は戸部(その他)十三画で、一九一ページ第四段に、「啓」は戸部八画で、三八八ページ第二段にも出し、そこに、たとえば「[相]↓5」とあるのは、同じ木部の五画を見てくださいという符号です。もとの部首で引く人のためには、目部四画の五十音順のところに「[相]↓木5⁽⁸⁰⁾」とあげて、木部五画、ページでいうと四三三ページに説明が出ていて、ことを示し、ページ数の下に「⁽⁸⁰⁾と小さく付記して、旧来の辞書ではここにいったことを表します。↓の符号は、所属部首を変更した場合はかりでなく、みなさんが引いてみそうな場所にはどこにも出しました。たとえば、楽器の「びわ」の漢字である「琵琶」の「琵」ですが、下半分の「比」部八画にも↓五⁽⁸⁰⁾と、小さい活字ながら、出しておきました。このついでに、ちょっと分類のしかたについて説明してみまし

よう。分類はものごとを整理するときによります。この場合、一家の系図のように初めは大きく分け、だんだん細かく分けるやり方と、デパートの売り場のように初めからかなり細かく分ける方法とがあります。わたくしの辞典の漢字の分け方はデパート式に近いでしょう。これに対して、初めから細かく分けすぎるという批評をされた方があります。その例に、中華民国で行われる四角号碼^{四角號碼}をおあげになりますが、これは少しみなさんには専門的すぎましようが、漢字の運筆法を十大別して、運筆法によつてすべての漢字を0から9までの四けたに數字化するので、この方法は、創案者が当時の最大出版業者のオールマネイジャーでしたから、かなり広く使われましたけれど、偏旁冠脚を知らない西洋人にはこの上なく便利であるといえ、われわれには、偏旁冠脚による分け方のほうが引きやすいのです。わたくしどもには、マシヨンの住人を捜すよりも、いく^{いく}棟かの長屋の住人のほうが楽に訪ねあてることが出来ます。

四 字 形 の 説 明

漢字の字形にはいろいろあります。まず、当用漢字字体表（これは字体表というよりも字形表と称すべきです）にある字で、当用漢字として使う字形が戦前使われていた活字の字形と一致しない字形が新字体とよばれていますが、これに対して戦前の活字の字形を旧字体といえます。ところで、字体表に出ていない字形はすべて活字体で、書くときは少し違つて書いてよいことになっており、その字形が小学校の教科書に使われ、したがって教科書体ともよばれています。

本辞典では、親字はすべて活字体を出しています。しかし、み

なさんは、小学校で教科書体を見慣れておいでですから、教育漢字八八一字と今後六年生で教えらるるはずの備考漢字一一五字とに限つてこれを親字の下にあげ、見慣れていない、当用漢字外の各字については略しました。親字の上下の囲みが「」のように黒く出ている漢字が当用漢字、「『』」のように白ぬきで出ている漢字が当用漢字外の漢字です。まれに「【】」とか「〔 〕」とかいう囲みの漢字がありますが、これは当用漢字補正案で削る字と補う字とを示します。もともと「当用漢字」とは、「当用日記」というものが戦前ありました。その「当用」で、用うべき意味ではなく、さしたつてその当座用いる意味ですから、二十年近く使われている今日までに当然訂補されてよいものですが、一度公表されますと、是非の批判がやかましく、なかなか改められませんでした。それで、やがて改められるものと考え、わたくしの旧著では、補正案によつて、よく新聞雑誌で使われている「灯」を見出しの親字にしましたが、教科書や公文書では、いまだに「燈」を使っていますから、本辞典では「燈」に直しました。

当用漢字外の漢字につきましては、世間で広く使われている字形をあげ、当用漢字とも正字・俗字・略字・本字・古字・誤字などを別に親字としてあげて↓で説明がしある字とその場所とがわかるようにしてあります。俗字とは正しい字ではないが、俗に世間で使われている字、略字とは画数が少ない、古今の俗用字、本字はもとの字形という意味で、古字に近く、古字とは、古代に使われていたと伝えられる字形です。

ただ、正字というものについては少し説明がいります。本来は戦前から学界で正しい字形と認められていた字形で、本辞典でもその意味に使います。ところが、当用漢字が制定されてから

は、当用漢字字体表に出ている字形を正字だと思い込んでいた人が出ましたが、これは誤りです。印刷所にしても、当用漢字の文章ばかり組んでいるところでは、新字体を正字と誤っているところかなりありますが、当用漢字以外の漢字の活字がたくさんある印刷所では、はつきりと、新字・旧字以外に、この辞典に「正字」とあげているような字形を正字と正しく区別しています。

「弘」(五四七ページ第二段)の説明に「俗用略字」とあります。これは、労働組合員などがかつてに使っている字形であることを示します。

「杯」(四二九ページ第二段)の説明の最初に「1盃」とありますのは、今は「盃」の字を「杯」とするすという意味です。この逆の「盃」(四〇ページ第二段)には「1杯」と明示しておきました。

五 親 字 の 音

親字の下に示るされている、説明の部分についてお話ししたいと思います。わかりやすいように、「親字の引き方」のところ为例にあげました「相」の字について説明してみます。

みなさん、この辞典の四三〇ページの第三段を見てください。親字の下に出ている筆写体(教科書体)はわかりますね。その下の「もと目4」も。

その下に④とあって、「シ・セウ・ソ(サ)ウ」とありますね。「相」という漢字の字音です。太いかな文字(ゴシック)に似た正しくはアンチック)で示るされているのは当用漢字音訓表にあり、現代表記法で、その字音の使用が認められているものです。()の中には、戦前のかなづかい(旧かな・歴史的かなづかい)では「シヤウ・サウ」と書いていたことを示しています。この字音のどこ

ろの片かなが、普通の細い字(明朝体)で記入されていれば、音訓表にない字音です。ところで、字音の記載法の別の例をあげてみましょう。

その一は「是」(四〇二ページ第二段)の場合です。まず④の記号があり、その下に「ゼ」とあり、次に⑤の下に「シ」とあります。この⑤は慣用音を示し、つまり、正しい字音は「シ」ですが、わが国で習慣的に「ゼ」と発音され、その「ゼ」が太文字ですから、音訓表で認められていることを表示します。

その二は「楽」(四二六ページ上段)で、④がなくて、「①ガク」とあり、その先に「⑩ラク」とあり、さらに先に「⑩ゴ(ガ)ウ」とあります。これは字音によって字義字訓が違ふ場合の表示法です。この場合⑩の上が「ガク」と読む場合の訓義、⑩の上が「ラク」と読む場合の訓義で、⑩の下が「ゴ(ガ)ウ」と読む場合の訓義であることを示します。

その三は「行」(四二二ページ第二段)の親字の下の「⑩ア」です。これはあまり多くない唐音(宋代の音の転)です。

その四は「芸」(二七一ページ第二段)の場合です。白ぬきで、④と⑤とにまず分けてあります。これは「藝」の新字体が昔からあった「芸」と同じ形になったもので、④の音義と⑤の音義とはもともと全く別であったことを示します。近ごろ労働組合などでは「闘」の字の画数が多いので、全く別の字で簡単な「斗」の字を誤って代用しています。そこで、そういう誤用の例までもこの辞典では収載していますから、「斗」(三九四ページ上段)には、同じ「トウ」という発音でも、④⑤に分けて説明しました。同音ですが、「斗」は普通「ト」を発音しますので、「トウ」という字音の上に慣用音の「ト」をあげました。

木や草や虫や鳥の名などには、漢字の造字法に習って、わが国で作られた漢字のような字があります。これは昔から国字とよばれていました。「勸」以外のこれらの文字には音がないわけです。そこで、たとえば四三二ページの下段の左方を見てください。字音が出ていないで、最初に「国字」とあります。

「桂」(四三二ページ第二段)とか、「橘」(四三九ページ第三段)とかには、字音の上に「人」という一字があります。これは当用漢字表にはない漢字ですが、音訓表ができたあとで、識者に当局がつつこまれて、人名には加えて使つてよいという字で、人名漢字表に入れられた漢字であることを意味します。この人名漢字と当用漢字を人名に使う場合はどういう読みでも、役所が出生届けのとき受け付けなければいけないことにきめられています。ですから、あなたがたの名まえの中には、学校の先生もちよいと読めない、むずかしい読み方があります。当用漢字で読みの制限をしており、その原則から考えるとおかしいではありませんか。本辞典には付録に、人名に用いてよい漢字の読み方を一覧表にして、弟さん、妹さんの名まえをつけるときの参考にしました。ご両親にこの部分を見せてあげなさい。きっと喜ばれますよ。

六 親 字 の 訓

われわれが普通使う訓とは、昔からわが国で漢字にあてて来た漢字の一字一字について一定している日本語の単語です。本来は、漢字本来の意味(義)と一致すべきであります。一致しない用法もあります。

親字の下の説明のうち、字音の下に、㊦㊧㊨と列記してあるのが訓義で、意味が違うごとに分類してあります。その順序はだい

たい使用度の多いものからあげてあります。訓義が一つだけの場合にも、それが訓義であることを示すために㊦を加えました。㊦以下が欠けているものではありません。

また、みなさんがわかりやすいように、まず「相」字(四三〇ページ第三段)について、具体的に説明しましょう。

まず㊦「アイ(七)」です。片かなの部分で訓の中で漢字に置きかえられることをさします。つまり「アイ」と読ませるために「相」字を使うときは、「アイ」の代わりに「相」と置き替えればよいということです。「㊦ミル」という場合には、「相」という漢字を「ミ」というかなの代わりに置き替え、「る」を添えることを示します。この添えるかなを送りがなとよびます。

なお、この場合でも、「アイ」は当用漢字音訓表にあるから太字で、「ミル」は音訓表にないから、細いなみ字で表示しました。音訓表では、普通、音を片かな、訓を平かなで書くことになっていますが、漢字に置き替えられる部分を明記するため、便法として本辞典では、このように、訓を片かなで表しました。字の横に線を引くという方法もありますけれど、印刷技術上はつきりしないこともありますので、この表記法を探りました。みなさん、まちがえないでください。

(七)はもちろん旧かなです。その下に、㊦㊧と分けてあるのは、「アイ」と読むときの違った意味を示します。㊦の項には、「日」と入れてあります。㊧の場合も同じです。これは、漢文ではそういう意味では使われず、わが国でのみ使うものであることを示します。しかし、漢文に用例がないと断言しえない場合もありますので、この区別はだいいたいと思ってください。

㊦「大臣」には片かながありませんね。これは、相を大臣の意

味に使う場合には訓がないからです。「大臣」のわが古いやまことばは「おとど」でしょうが、「相」一字を「おとど」と読んだ例は普通にはありません。「―成る」「武―」は「相」字を使った用例です。「―」のところに「相」字がはいります。別の例が、「相」以外のところにありますから、その説明もいたしましう。

「雨」(六一三ページ第三段)の訓に「アメ」「アマ・サメ」とあります。これは、音訓表には「ウ」という音と「アメ」という訓としか出ていませんが、「雨水^{あめ}・雨具^{あめぐさ}・小雨^{こあめ}」というように転用が認められていることを表します。

七 筆順の見方

もう一度「相」(四三〇ページ第三段)を見てください。親字の説明のあとに、行を改めて、「筆順」とありますね。この筆順というものについても、「現代表記と本辞典」の「三」の中で説明してありますが、整った、きれいな文字が書ける、運筆の順序です。本辞典では、利用者の要望によって、教育漢字八八一字、および新しく六年生が使うことになった備考漢字一一五字についてだけ示しました。一行に収録するため、わかりやすい順序は一つにまとめましたが、④とあるのは四年生のときにはじめて学ぶ漢字であることを示します。学年配当(何年生が習うか)です。(1)―(5)は一学年後の学年配当を示しますが、これは、この学年で指導したほうがよいという、専門の教育家が指示した結果で、(6)は六年生で、この程度の漢字は教える必要があると指示された分です。

八 熟語の構成

熟語とは、二字以上を結びつけて、新しい意味を表したものをいいます。ただし、この中には、結びつけられた各字の意味を合わせると意味がわかるものがあります。

熟語はすべて第一字の親字のところにまとめました。これは新しい方法ではありません。その配列は第二字の総画数の少ないものから多いものへと並べ、同一画数内の順は、慣用の字音の五十音順によりました。

前にも説明しましたが、あまりたくさんの中から目的のものを捜し出すことはむずかしいものです。そこで、この辞典では、みなさんが卒業されて広い実社会に出ても必要があるまいと思われするようなむずかしい熟語はもちろん除きましたが、一方では、みなさんが国語辞典を利用されるような、読みやすい熟語で、しかも各字の意味を知っていれば、それを合わせて考えたと容易に意味がわかりそうな熟語は、親字の説明中に、用例としてあげ、熟語の中から省きました。しかし、現代表記法では漢字の使用を認めていないあて字を多く入れ、その初めに(あて字)という表記法を使いました。

漢文の中で使われる漢語と、わが国で造られて、漢文の中では使われない準漢語との別は、親字の用法よりはるかにむずかしいものです。だいたい、本辞典にはわが国で使われる熟語を主として収録しているので、漢文を読むことがない、本辞典の利用者にはこの区別は必要ではないと信じてやめました。まれに(日)という例が出ていますが、それは、「わが国では……」と書き加えると一行ふえるような場合の省略のためです。